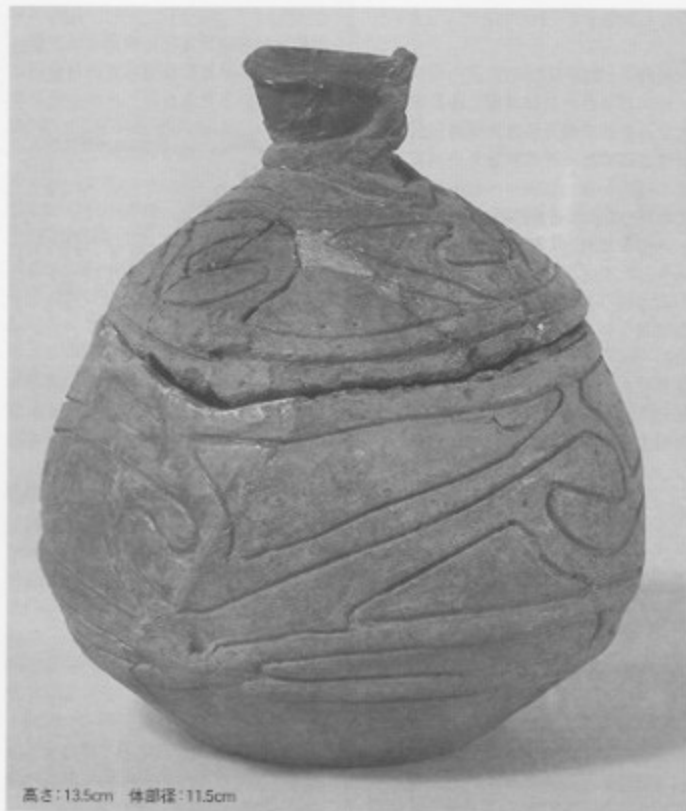


■館蔵資料紹介

切断蓋付土器 (浄法寺町合名沢遺跡 小田島コレクション)

高木 晃 (学芸員)



高さ:13.5cm 体部径:11.5cm

この土器は当館所蔵小田島コレクションのうちの一つで、浄法寺町合名沢遺跡から出土した縄文時代後期初葉（約4千年前）の壺です。全体に赤みがかった色調で、片手で持てるような大きさです。口が非常に小さく作られています。よく見ると上から3分の1位の所に切れ目が入っていて、上の「蓋」と下の「身」に分かれています。このような土器は「切断蓋付土器」と呼ばれており、いったん壺の形に成形した後で、焼き上げる前の生乾きの時に切り離されているようです。

蓋と身の双方には向かいあった2ヶ所に3mm程度の小さな穴が開いた突起があります。蓋と身を結わえ付けるための紐が通されていたと思われます。

また切断面は細かい凹凸が連続してギザギザになっています。ヘラ状の工具を少しずつずらしながら突き刺して切り離し、蓋と身のかみ合わせが良くなるように工夫されたようです。

この写真ではわかりませんが、蓋も身も所々に赤い顔料が付着しており、もともとは全体が真っ赤に塗られていたのかも知れません。

文様は粘土細を貼り付けた区画の中に、細い線によりと三角形の文様を組み合わせたモチーフが描かれています。このような文様は東北地方北部に盛行した「十層内式土器様式」に特徴的に見られるタイプです。

切断蓋付土器自体も青森県を中心として、北海道渡島半島南部、秋田県北部

岩手県北部にかけての地域に分布しています。時期は縄文時代中期最終末～後期前葉にかけての段階（約4千年前）に限定されています。

切断蓋付土器の用途についてはまだわからないことが多いのですが、1遺跡から出土する数が非常に限られていること、煮炊き等に使った痕跡がないこと、大部分が顔料で赤く塗られていることなどから、日常使ったものとは考えにくい状況です。

蓋が外れないような工夫が見られますので、中にはよほど大事なものが収納されたのでしょうか。

青森県の事例では内部に人骨が埋葬されていた大型の切断蓋付土器があるため、土器棺を含めた葬送儀礼に使われた壺ではないかとする説があります。

十層内式土器様式に代表されるいわゆる「十層内文化」圏では石棺墓、土器棺墓、配石遺構、キノコ形土製品、手形・足形付土版など葬送、祭祀に関連する独特の遺構、遺物が発達します。切断蓋付土器もこれらと同じ歩調で出現し、消滅していくことから、十層内文化を特徴づける遺物の一つとして注目を集めています。

切断蓋付土器分布図



成田滋彦 1999「真形土器 切断蓋付土器」『研究紀要』4 青森県埋蔵文化財調査センターを参照作製